明日への道標

仕返しをしない勇気
―ブランチ・リッキーとメジャーリーグ―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

背番号42はアメリカのメジャーリーグ全球団で永久欠番に指定されている。２リーグ制以降の近代メジャーリーグで黒人初のメジャーリーガーとなったジャッキー・ロビンソンを讃えて1997年に決定された。彼がデビューした４月15日は2004年に「ジャッキー・ロビンソン・デー」と定められ、すべての選手が背番号42のユニホームを身につけてプレーするようになった。

人種差別の壁を打破した英雄として栄光を手にしたジャッキーの背後にはもうひとりのヒーローがいた。ブルックリン・ドジャースの社長兼ゼネラル・マネージャーであるブランチ・リッキー（1881―1965）の並々ならぬ英断によってジャッキーは陽のあたる場所に躍り出る。とりわけ契約の際にふたりが交わした約束が人種を超えた絆となって重い歴史の扉を開いていく。

忘れられない悔し涙

リッキーはオハイオ・ウェスリアン大学を卒業後、1905年にセントルイス・ブラウンズでメジャーデビューする。２年後にニューヨーク・ヤンキースに移籍し、際立った成績を上げられないまま現役を引退した。

ミシガン大学のコーチを経て1913年、古巣のブラウンズに経営陣の一員として復帰する。1919年、セントルイス・カージナルスの監督に就任するとチームを４年ぶりの勝率５割以上に導き、1923年まで上位の成績を維持した。だが翌年から

ジャッキー・ロビンソンとリッキー

失速気味となり、やむなく監督を退いてオーナーに次ぐ権限を持つゼネラル・マネージャー（ＧＭ）に転身する。

1942年、ブルックリン・ドジャースの総支配人が第２次世界大戦で徴兵されると社長兼ＧＭとして球団の運営を任された。リッキーは黒人選手を迎え入れるために抜本的な組織改革に着手する。

それまで黒人選手は黒人だけのニグロリーグでしかプレーできなかった。リッキーはマイナーリーグをメジャーリーガーの養成機関と位置づけて有望な黒人選手を段階的に獲得する道を拓く。ニグロリーグで活躍していたジャッキーは1946年、リッキーにスカウトされてドジャース傘下のモントリオール・ロイヤルズと契約した。

黒人選手の受け入れにリッキーが情熱を注いだのは大学チームのコーチ時代の衝撃的な体験に起因していた。インディアナ州に遠征した際、唯一の黒人選手トーマスがホテルで宿泊を拒否される。リッキーは仕方なく自分の部屋にハンモックを吊って彼を泊まらせた。そのときトーマスは激しく手をかきむしりながら「この手が白ければ…」とむせび泣いた。のちにリッキーは悔し涙を流す彼の姿がずっと忘れられなかったと語っている。

立派な紳士で偉大な選手

モントリオール・ロイヤルズへの入団が決まったジャッキーは1919年、人種差別が激しかった南部ジョージア州の片田舎で生まれた。父は小作農で四男一女の末っ子だった。貧しい生活に嫌気がさした母は子供たちを連れて家出する。

スポーツ万能で学業にも秀でていたジャッキーはUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）に進学したものの、太平洋戦争の勃発で1942年から兵役を余儀なくされる。所属した陸軍でも差別され、白人優先のバスの後部座席に押し込まれることを拒否して軍法会議にかけられた。終戦後の1945年、ニグロリーグのカンザスシティ・モナークスに入団して頭角をあらわす。

マイナーリーグに登用されると差別は一段とエスカレートした。キャンプ地のフロリダに移動するために新妻のレイチェルを連れて空港へ行くと搭乗便を後回しにされ、やむなく長距離バスに乗り換えると粗末な黒人専用席に追いやられた。何とか到着してもホテルには泊まれず黒人居留区の有力者の家に身を寄せる。

身内からの風あたりも強かった。リッキーは部下から「正気ですか？」と軽蔑のまなざしで詰め寄られる。そんなとき彼は「君が死んだら神さまに会うだろう。そのとき君は『黒人を差別しました』と言えるのか？」と切り返した。

批判的な論調のマスコミに対しても「肌の色が黄色でも黒でもかまわない。シマウマ柄でもだ」と皮肉を込めて開き直った。ジャッキーには「君にはこれから困難な戦いが待っている。勝つ方法はふたつしかない。立派な紳士であり、偉大な選手だと示すことだ」と諭していた。

期待に応えてジャッキーは1946年、ロイヤルズの内野手として先発メンバーに入り、ジャージーシティ・ジャイアンツとの開幕戦に出場する。結果は５打数４安打１ホームランと見事なものだった。その年の成績は３割４分９厘で堂々と首位打者に輝き、あらゆるプレッシャーを跳ねのけて実力を証明した。

共に苦しみを分かちあう

当時のメジャーリーグ16球団に登録されていた選手は400人で全員白人だった。ジャッキーのメジャーリーグ昇格をめぐって開かれたオーナー会議は紛糾し、ドジャースを除く全球団が反対した。だが裁定を下す最高権限を持つコミッショナーのハッピー・チャンドラーがリッキーを支持し、急転直下でドジャースへの入団が認められた。

1947年４月15日、ついにジャッキーは歴史的なメジャーデビューを果たす。ドジャースの本拠地エベッツ・フィールドは約２万７千人の観客で埋めつくされ、その半数以上を黒人が占めていた。

試合を重ねるたびに会場は怒号と歓声で騒然となり、観客や対戦チームから「猿はジャングルに帰れ！」といった下劣なヤジを浴びせられた。球団や自宅には「殺してやる」と書かれた脅迫状が毎日のように届く。チームメイトからも孤立し、ジャッキーを嫌ってトレードを申し出る者もいた。

悩み苦しみながらもジャッキーは挫けず打率２割９分７厘、12ホームラン、48打点、29盗塁で新人王と盗塁王を獲得する。そんな彼に周囲の人々もしだいに敬意を抱いていく。リッキーは汚いヤジに憤慨した部下に「君はジャッキーと苦しみを分かちあうことができたのだな。同情の語源はギリシャ語の苦しみだ。苦しみを共に分かつという意味だ」と満足気に語りかけた。

俊足の好打者としてジャッキーは首位打者やMVPに輝き、チームを初のワールドチャンピオンに導いた。リッキーが亡くなって７年後の1972年、まるで燃えつきたように53歳で他界する。

差別に耐え抜いたのはリッキーとの約束を守ったからだ。契約の場でリッキーはどれほど罵詈雑言を浴びせられても冷静でいられるかと尋ねた。ジャッキーはすかさず「あなたは仕返しもできない腰抜けが欲しいのですか？」と問い返す。

次の瞬間、リッキーの口から生涯を通じて魂に刻み込まれる言葉を聴いた。

「私は決して仕返しをしない勇気のある選手を探していたのだ」。